高知大学 病院ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長　山本　哲也
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長　杉浦　哲朗

退任のご挨拶

医学部長　橋本　良明

平成25年度末をもって医学部長を退任することになりました。ここに一言ご挨拶申し上げます。平成24年4月に就任して以来の2年間ではありましたが、なんとか学部長の職責を務めることができましたのも、ひとえに皆様方のご協力ご支援のお陰と心から感謝申し上げます。

振り返ってみますと、実に多くの出来事がございました。中でも、医師数不足が叫ばれている昨今の社会状況の下で、昨年の医師国家試験における本学の結果は学内外に反響を呼びました。医師養成機能における本学への社会的信頼評価に直結する大問題であり、直ちに教職員一丸となり対策委員会を立ちあげましたが、今年はその成果が良い方向で現れるよう期待しています。また、就任直後には、教員人事における各部局配分ポイント削減の問題に直面し、苦慮しましたが、全学的ご理解の下、医学部では総ポイント数を当面の間維持することができ安堵致しました。しかし、時期を同じくして、大学改革への一環として、高知大学では社会協働学部の新設に向けての検討が本格化し、それに伴い新たに全学的な教員人事凍結という事態が生じ、教員採用昇任人事が動かせなくなり、医学部および附属病院の教育、研究および診療活動に多大のご不便をお掛けしてきました。これも昨年末からようやく医学部では特例的に人事が動き始めましたが、全面的な人事凍結解除が待たれます。

その他、国から求められた医学部機能の再定義への対応、臨床研修マッチング低迷対策、大学院志願者減少傾向対策、医学教育の質向上に向けた学務対策と医学教育の認証評価申請に向けた準備委員会立ち上げなど様々な課題がありました。これらの多くは今後も継続して取り組まなければなりません。現在、岡豊キャンパスでは新病棟や新研究棟の建設、新講義室の整備、キャンパス周辺環境改善への取り組みなど新しい時代が訪れようとしています。引き続き変わらぬご協力ご支援をお願いいたします。

病院長　杉浦 哲朗

平成22年4月1日より病院長を務めさせていただき、はや4年が経とうとしています。この間、病院には安心で安全な医療が求められる一方、高齢化社会と医療の高度化がますます進んだ結果、医療は複雑化し、医療現場は過剰な臨床業務に追われています。また、経済的にも社会的にも厳しい環境の中で、大学附属病院もコスト意識を持って臨床業務を行わなければならない状況下におかれています。そこで、本院では臨床業務を分担・連携する「チーム医療」を基に病院運営を行い、さらにチーム医療の重要な構成員であるコメディカル職員の増員及び常勤化を推進して各医療職の負担を軽減し、良質で効率的な医療を提供する「安心してかかれる病院」を目指してきました。その結果、「医療の機能」や「経営状況」等12項目を指標とした2012年と2013年の「頼れる病院ランキング」（週刊ダイヤモンド社）で、本院は全国42国立大学附属病院の上位にランクされました。職員の皆さまにはそれぞれの立場で自立・自律の精神で患者さんのcareとcureに尽くしていただき感謝申し上げます。

本院の診療報酬請求額は、平成16年の法人化スタート時の103億円に対し平成24年では151億円と1.5倍となりました。しかし、DPCⅠ群に属する80の大学附属病院本院中、稼働率、診療単価等は下位に低迷しています。一方、医師一人当たりの診療報酬請求額は上位にランクされていることから、いかに本院では職員一人一人の負担が大きいかが伺えます。附属病院収入の増収分等を活用した医療職員の処遇改善はまだまだ通過点で、次期横山彰仁病院長に引き継ぎたいと考えています。

平成24年度からスタートした病院再開発の第1ステージである新病棟の完成は今年11月を予定しており、建物のみならず設備・医療機器の充実が図られます。さらに既存病棟、外来棟、中央診療施設改修工事と平成31年まで工事が続きます。借入金の返済で赤字とならないためには現在の外来診療を維持しつつ、効率的な病床運用、高額手術実施件数の増加を図り、病床稼働率85%及び入院診療単価65,000円を目指さなければなりません。次期横山病院長にはさらなる健全な経営を行っていただくことで、皆さまの働きやすいよりよい職場が実現されると確信しております。平成26年度の診療報酬改定に期待するとともに、職員皆さまの一層のご理解、ご協力をお願いいたします。4年間どうもありがとうございました。

退任のご挨拶

「退職を迎えて」

産科婦人科　深谷　孝夫

丁度ミレニアムを迎える前年、1999年3月に当時の高知医科大学に赴任して以来、早いものであっという間の15年が経過致しました。その間、大学統合や新臨床研修制度の開始などの大きな出来事を経験し今日に至りました。着任当時は各診療科とも教育・臨床・研究を存分にこなせる体制が確立されており、また地域医療における大学の存在意義は大きいものでした。私としては前任地で経験してきたことと高知医科大学産婦人科の伝統を融和させながら、新たな展開を構築できればと考えておりました。この15年間を振り返ってみれば、産婦人科講座構成員すべて、助産師・看護師の皆さん、コメディカルの皆さんのご協力のお陰で、研究においては新たな発想のもとの子宮内膜症発症の解明、臨床においては内視鏡手技を大いに取り入れた手術を導入し、大きな成果を得ることが出来たと考えております。

しかしながら良いことだけの連続ではありませんでした。正直申し上げてこの15年間最も頭を悩ましたことは、高知大学産婦人科のことではなく、高知県の産婦人科医療・周産期医療のことでした。「人は石垣」と言われておりますが、新臨床研修制度の開始と共に大学に在籍する医師が減少し、大学におけるマンパワー不足が顕著になりました。その結果、地域へ貢献できる医師が少なくなり、多くの領域や地域において医療資源の枯渇を引き起こしました。高知県の産婦人科医療と大学の産婦人科医療は別と割り切れれば良いのですが、実際には一個人に大きなプレッシャーとなって襲いかかり、眠剤なければ眠れずと言うのが現実でした。

幸いなことに、在籍中はスタッフの努力のお陰で、少ないながらも毎年新たな産婦人科医師を迎えることが出来ました。波風はありましたが、地域医療に貢献すると共に、特定機能病院として増加する一方のハイリスク分娩や多くの悪性疾患に対応出来たことは、産婦人科講座全員の努力の結果であると自負しております。

最後になりましたが、恙(つつが)なく定年退職を迎えることが出来ましたこと、診療科のみではなく、高知大学医学部・附属病院のすべての方々のご支援の賜であり心から感謝申し上げます。ただ、定年退職とは言え、長い人生の一区切りにしか過ぎません。個人的にはまだまだ青春時代を謳歌しているつもりであります。場所は高知から離れますが、力の限り医療の道を邁進していこうと考えております。現在の高知大学附属病院は経営も安定し、再開発への道を突き進んでおります。明るい展望が開けている高知大学附属病院のさらなる飛躍を祈念し退職の挨拶と致します。

「ゴールを走り抜ける!」

整形外科　谷　俊一

あと1ヶ月余りで定年退職を迎えることになりました。本学へ赴任して33年間、人生の半分と整形外科医としての人生の大部分の期間、僕は本学で育てて戴きました。皆様には公私にわたり大変お世話になりありがとうございました。

2年前の丁度この時期、病院ニュースで医療学系長「新任のご挨拶」をいたしました。そして、倜儻不羈(てきとうふき)の精神を失わないようにと自分に言いきかせつつ医療学系長の任務を果たしたいと述べました。倜儻不羈は明治の知識人の合い言葉であったようで、「倜儻(てきとう)」とは自分の考えをしっかり持って人の意見に安易に従わないこと、「羈(き)」とは手綱をつけて馬をおとなしくさせること、従って「不羈(ふき)」とは人に御せられないことを意味します。欧米諸国のアジア侵略の潮流から日本を守るために明治維新を起こした人たちの間では、当時、新しい国づくりは「倜儻不羈」の人でないと駄目だという時代の風潮が澎湃(ほうはい)としてあったのでしょう。しかし僕の場合、今日の医学部の困難な状況に対し、「倜儻不羈」の精神への憧れを充分に具体化することができず、皆様のご厄介になるばかりで、バランス感覚重視に終始した感があり申し訳ありません。

つい先日、テレビを見ていると、陸上100 m走の若きホープ桐生祥秀選手の特集のような番組があり、その中で、桐生選手の100 m走のビデオを世界記録保持者のボルト選手(ジャマイカ)に見せて意見をきくという企画がありました。ボルト選手によれば、「桐生選手の走りはスタートから終盤までは素晴らしいが、ゴール直前に力んでフォームが変わっている。タイムをさらに更新するためには終盤と同じ気持ちでゴールを走り抜けることが重要だ。」とコメントしていました。僕も定年退職のゴール直前ですが、それを意識せずこれまでのペースで走り抜けようと思っています。皆様の長年に亘る暖かいご支援ありがとうございました。

退任のご挨拶

放射線科　小川　恭弘

如月の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、私こと、少し早いですが、このたび、高知大学を退職することとなりました。

思えば、1982年の8月16日付けで、旧高知医科大学の放射線科に採用して戴いて以来、約31年半の長きにわたり、高知大学に勤務させて戴き、これまでの私の人生の半分以上の期間を高知、また高知大学で過ごさせていただいたことになります。この間、大変多くの先生方・皆様に御世話になり、心から御礼申し上げます。約6年前、郷里の兵庫県西宮市に在住していた父親が軽い心不全ということで救急病院に搬送され、約2週間で死亡しましたが、その時何のサポートもしてあげられなかった事が、心の大きなトラウマとなっております。今回、独居中の86歳の母親が徐々に弱ってきており、兄嫁さんの支援も受けられない状態であり、急遽、私が兵庫県に帰ることになった訳であります。

大学の先生方・皆様や多くの患者さん、また、学位論文作成中の大学院生の方々、バスケットボール部の皆様には、大変ご迷惑をおかけしまして、誠に申し訳ございません。増感放射線療法KORTUCの基礎・臨床研究も、未だ道半ばでありまして、今後の先生方のご継続に期待するものであります。本年4月1日からは、兵庫県立加古川医療センターの病院長として勤務の予定です。救急医療や生活習慣病の診療を主体とした、地域の中核病院であり、慣れない仕事ではありますが、これまでの本学での多くの経験や知己を心の糧として、いま暫く頑張っていこうと思っております。加古川医療センターは、神戸から西へ電車で約30分と比較的近い距離にあり、現在、本学出身の研修医も勤務されております。今後は、本学の臨床研修病院の一つとしての役割を担うことができれば、誠に幸いであります。5年生の学生の皆様のご見学、大歓迎ですので、ぜひご連絡下さい。

本学の皆様の益々のご健勝とご活躍ならびに本学と附属病院の益々の御発展を祈念致しまして、私の退職のご挨拶とさせて戴きます。

治験貢献賞表彰

高知大学医学部附属病院では、治験に貢献された医師に病院長より表彰状を贈呈しています。承認前の医薬品の安全性、有効性を確認する治験に貢献された医師を表彰することで、治験に対する理解とモチベーションを高めることを目的としています。

本年は、平成25年11月27日に治験貢献賞授与式を開催し、平成24年度に本院で行われた治験において活躍された下記の先生方を表彰致しました。

治験貢献賞

1位

整形外科　講　師　川﨑　元敬

2位（同率）

皮膚科　教　授　佐野　栄紀

泌尿器科　准教授　井上　啓史

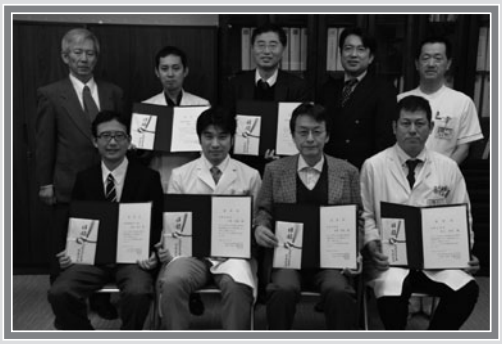
治験実施優秀チーム賞

（同率）

泌尿器科　教　授　執印　太郎

血液・呼吸器内科　教　授　横山　彰仁

整形外科　准教授　池内　昌彦



永年勤続表彰

永年勤続表彰式が平成25年11月22日に朝倉キャンパスで行われました。
岡豊キャンパスからは次の9名の方が表彰されました。

表彰式に出席された皆さん

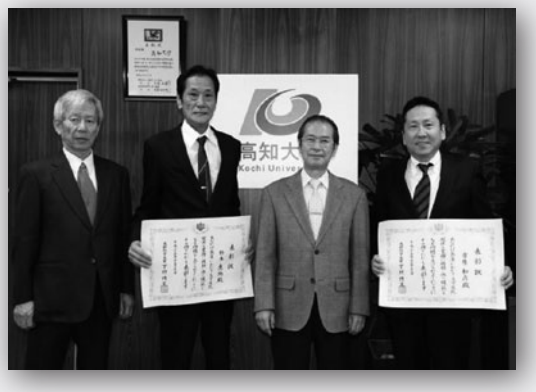
保健管理センター	隅田　はぎ枝
放射線部	安並　洋晃
放射線部	佐々木　俊一
輸血部	西　満子
看護部	秋森　久美
看護部	東郷　和香
看護部	竹内　若夏子
看護部	小笠原　美和
看護部	安岡　理香

20年間お疲れさまでした。今後ともよろしくお願いします。

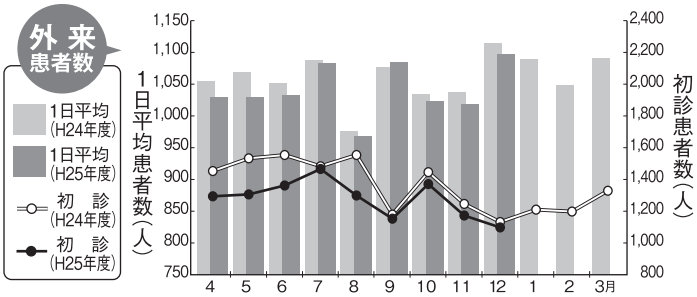
医学教育等関係業務功労者表彰

文部科学大臣は、毎年医学又は歯学に関する教育・研究、もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった方を表彰しています。

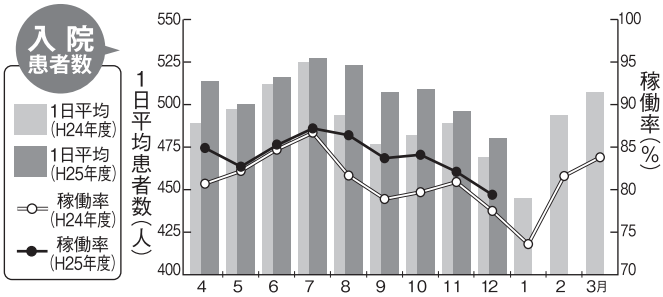
平成25年度も、この表彰式が11月21日に東京で行われ、本院の受賞者である薬剤部　市原和彦副部長と、栄養管理部　朴木惠助調理師の両名に、表彰状及び副賞が贈呈されました。



診療状況



1日平均患者数は11月と12月ともに前年同月に比べ若干の減少。初診は4月から連続して前年を下回っている。



患者数・稼働率共に、4月から連続して前年同月に比べて高くなった。11月と12月も1%以上増加した。

編集後記

今年度より編集委員を担当しております、検査部　松村でございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。第155号では、今春ご退任されます先生方のお言葉を頂きました。橋本医学部長、杉浦病院長、深谷教授、谷教授、小川教授には永年のご尽力・ご指導、深謝の限りです。お疲れ様でした。また、治験貢献、永年勤続、医学教育等関係業務功労につき表彰されました皆様には、感謝・お祝い申し上げます。

さて、この年末年始は9連休という長丁場でした。日勤・夜勤、日直・当直、呼び出しなど各部署で勤務された皆様、本当にお疲れ様でした。新病棟建設工事のクレーンは忙しく動いています。4月からは、新医学部長・新病院長のリーダーシップのもと、職員一丸となって、病院再開発の平成31年度完成に向かって邁進して参りましょう。本年が、皆様にとりまして素晴らしい1年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。

（文責:松村　敬久）